

ミステリ読書案内

2024. 4. 8 発行元

第565号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

陳舜臣「ベスト表」(再掲)

『阿片戦争』などの歴史小説家としてたくさんの著作を遺した陳舜臣。その初期の頃のミステリ作品『ベスト表』を再度取り上げることにする。「謎解き」に力点を置いた作品作りをしていた時期もあった。

名探偵・陶展文の生みの親

陳舜臣のミステリ代表作については、この『ミステリ読書案内』でも既に二回取り上げた。一回目は『枯草の根』『炎に絵を』『方壺園』の三作を、二回目には『孔雀の道』『割れる』『北京悠々館』の三作を紹介した。いずれも陳舜臣らしさに溢れた作品である。

今回は初期の作品の中から『三色

の家』、中期の作品の中から『玉嶺よふたたび』を選んでみた。

私の手元には右の『ベスト表』に掲げた作品の本がほとんど残っているが、世の中では一部を除いて手に入りにくくなりつつあるようだ。古書市場でも出品の数が限られ、品切れになっている様子も窺える。忘れ去られるのは惜しい。皆、上質のミステリなので、若い人たちにも読んでもらえると有難いのだが…。

「三色の家」

1962年講談社。『枯草の根』に続く長編第二作になる。私の手元にあるのは講談社文庫版。『枯草の根』に登場する名探偵・陶展文は五十歳で神戸の中国料理店「桃源亭」の主人。すっかり落ち着いた言動。でも本書に登場してくる登場してくる陶展文は大学を卒業したばかりの青年。若き日の名探偵の活躍を描く。

陶展文は留学を終えて帰国の準備をしていた。そこへ東京での学生時代を一緒に過ごした喬世修から神戸へ来てほしいとの連絡が来る。海産物貿易をしている同順泰会社の経営者である喬の父親が亡くなったとのこと。神戸の海岸通りに、一階は赤煉瓦、二階三階は白モルタル、屋根が青色トタンの「三色の家」と呼ばれている店がある。陶展文が到着した途端に殺人事件が発生。三階の干物の干し場でコックの杜自忠がなぐり殺されたのだ。犯行現場の出入口は他の人たちの目で見張られていて、人の出入りはなかったとの証言が得られた。喬の父親をめぐる神戸の人間関係が絡み合っているようなのだが…。乱歩賞受賞第一作として、「謎解き」ミステリを強く意識した作りになっている。

「玉嶺よふたたび」

1969年徳間書店。私の手元にあるのは角川文庫版。『孔雀の道』と二作で併せて同年の日本推理作家協会賞を受賞している。初期の頃の「本格謎解き」の形式から「物語性」の重視へ移行していく段階の作品と言える。その延長上に歴史小説の一群があるのだと思う。

S県で組織された大学教授八人をメンバーとする訪中視察団。五十歳になった東洋美術史専攻の入江章介は二十五年前の戦時中に二年間中国で過ごした経験がある。団体視察が終わった後の二日間は各自の希望の場所へ行っていることになった。入江は上海から少し入ったところにある「玉嶺」を訪れることを希望した。文化大革命が進行している時期で、許可されないのではないかと考えたが、無事認められた。一緒に行くのは中国の学者が一人。「玉嶺」にはたくさんの素朴な摩崖仏があり、それを再び目にしたいと考えたこともあるが…、頭に思い浮かぶのは二十五年前に出会った美しい中国娘の李映翔のこと。玉嶺第三峰の摩崖仏の唇のところに朱を入れる儀式(点朱)の時の姿が甦る。青春時代の激しい恋の思いと、その人のためになるならと考える行動したこと…。戦時の中国、抗日ゲリラが活発に動いている最中であり、歴史の流れに翻弄される二人の運命は…。そして二十五年後に「玉嶺」で引き起こされる出来事とは…。

《陳舜臣のベスト表》

1. 枯草の根
2. 孔雀の道
3. 割れる 陶展文の推理
4. 三色の家
5. 虹の舞台
6. 弓の部屋
7. 北京悠々館
8. 炎に絵を
9. 玉嶺よふたたび
10. 長安日記 (短)
11. 柵の館
12. 方壺園 (短)
13. 闇の金魚
14. 影は崩れた
15. 怒りの菩薩
16. まだ終らない
17. 他人の鍵
18. 異郷の檻の中で (短)
19. 凍った波紋
20. 月をのせた海
21. 紅蓮亭の狂女 (短)
22. 崑崙の河 (短)
23. 天の上の天
24. 燃える氷柱
25. 幻の百花双瞳 (短)
26. 神戸異人館事件帖 (短)
27. 崩れた直線 (短)
28. 望洋の碑 (短)
29. 白い泥
30. 南十字星を埋めろ (短)
31. 異人館周辺 (短)
32. 銘のない墓標 (短)
33. 夜の歯車 (短)